

稲荷塚古墳



墳頂の稲荷社鳥居とスダジイの大木



稲荷塚古墳全景



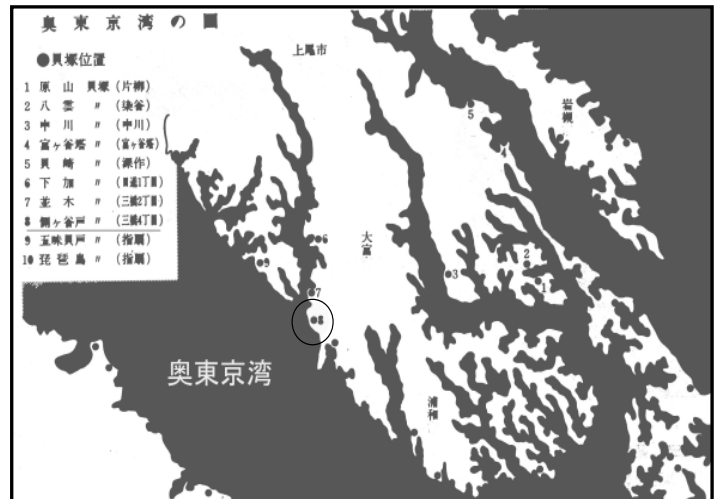
空からみた稲荷塚古墳

地域の概況

今から約 7000 年前から 5500 年前ほど前の縄文時代早期から前期にかけて、温暖化により県南部の低地は海水が侵入し大宮台地は海に突き出た海岸線となった。この頃の湾を奥東京湾と呼んでいる。そのころ人々は、狩猟や木の実・魚貝類をとって生活していた。大宮西高周辺の側ヶ谷戸貝塚は前期の貝塚である。

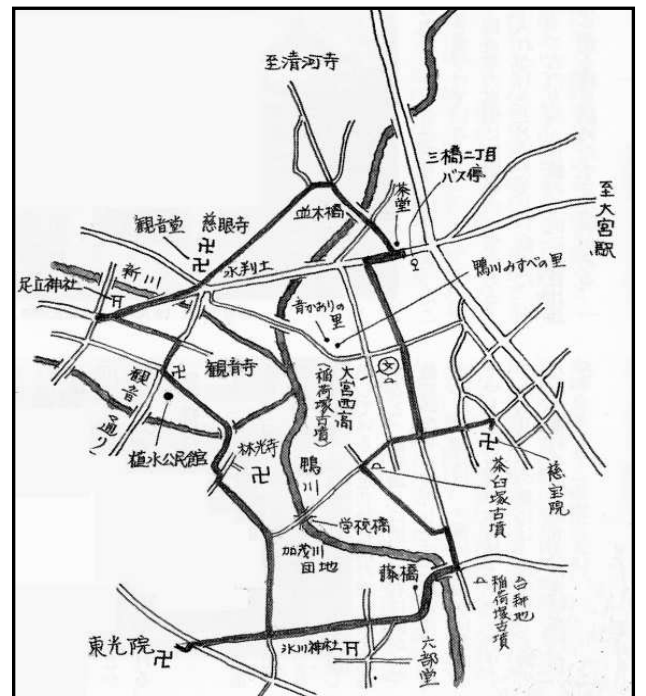
大宮周辺の稲作開始は、紀元前 1 世紀頃であったと推定されている。稲作は沼地や河川流域で行われ、その頃から村落共同体が形成されて身分の差が生じ、有力な首長が出現した。

4 世紀の始め頃から巨大な古墳が製造され始めた。金象巖銘の鉄剣出土で注目された稲荷山古墳は 6 世紀初期に築かれた古墳で、この頃には東国も大和大王の勢力が及んでいたと推定されている。鴻巣・桶川・上尾・大宮・与野・浦和における古墳の分布は、荒川にのぞむ台地上にみられ、大宮台地縁辺の開発は、主に荒川の沖積地帯に集中していたことがわかる。



側ヶ谷戸(そばがいと)古墳群

鴨川流域は県域でも有数の肥沃な農耕地帯であり、植水古墳群や側ヶ谷戸古墳群、その南には白楯古墳群や大久保古墳群が続いている。いずれも 5 世紀中頃から 7 世紀後半にかけて築造された小規模な円墳が主体となっている。このうち三橋 4 丁目に散在する五基の古墳（北から**稲荷塚古墳**・**山王山古墳(慈宝院内)**・**茶臼塚古墳**・**上の稲荷古墳**・**台耕地稲荷塚古墳**)は側ヶ谷戸古墳群とよばれ市指定文化財(史跡)となっている。また、茶臼塚古墳の西側水田にあったといわれる井刈古墳など、開墾によって消滅した古墳もいくつかあったと推定されている。

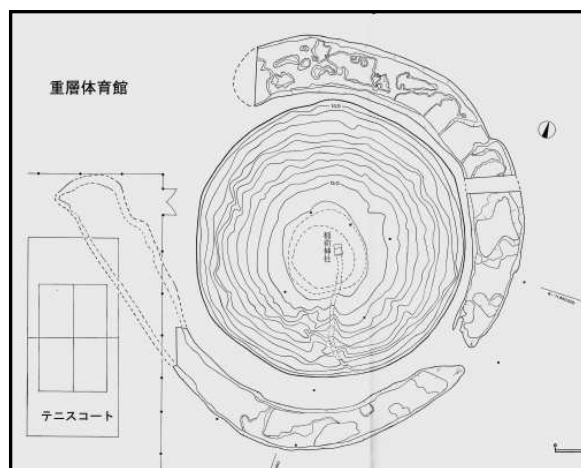


稲荷塚古墳発掘調査

大宮西高内の稲荷塚古墳は、6 世紀末ころ築造されたと推定され、高さ約 6 ㍎、墳丘の直径が 35 ㍎ある円墳で、県南部では最大の古墳である。1981~1982(昭和 56・57)年に周溝の発掘調査が行われ、多数の円筒埴輪や人物埴輪 1 体、勾玉が出土した。これらは、現在、さいたま市立博物館に所蔵されている。

(『埼玉ふるさと散歩』(さきたま出版会)より)

また、本校の校庭削平の際(昭和 23 年当時三橋中学校)に、武笠昇司氏が現在の事務室前あたりで人物埴輪 2 点を採集し、そのすぐ西側でも直刀の破片や円筒埴輪の破片が出土した。



稲荷塚古墳全測図



発掘風景

稲荷塚古墳出土品(1)

円筒埴輪

円筒埴輪は、弥生時代の末期に吉備地方＝現在の岡山県で墓に供えられた「特殊器台・特殊壺」を起源とするものと考えられている。これは複雑な文様で外面を飾り、亡き被葬者に対して供物を捧げるという行為を表したものと考えられている。そして、これらが古墳出現期（3世紀）に大和地方に採り入れられ、その後古墳時代前期を通じて円筒埴輪として変化していった。その過程で、「特殊器台」に「特殊壺」を乗せた様子は朝顔形埴輪として変化し、円筒埴輪と朝顔形埴輪が古墳や周濠のまわりを取り囲むようになった。



円筒埴輪（武笠昇司氏所蔵）



円筒埴輪（さいたま市立博物館蔵）

人物埴輪

人物埴輪が出現した時期は5世紀のなか頃で、出現の理由については「日本書紀」の「垂仁紀」に野見宿禰が陵墓へ殉死者を埋める代わりに土で作った人馬を立てることを提案したという記述を根拠とした殉死代用説があるが、現在では否定的な学者が多い。近年では、埴輪は古墳時代の葬列を意味していると考えられ、「死の旅に追従する人や馬を生けるものにかえたのが埴輪だった」という考えもある。



人物埴輪（武笠昇司氏所蔵）

人物埴輪の伝播

関東では群馬と埼玉、栃木、茨城の博物館にすばらしい人物埴輪がある。その伝播は、人物埴輪と関わった、あるいは、人物埴輪を葬送儀礼として採用した氏族の移住によって全国各地に伝播されたと考えられている。



人物埴輪（さいたま市立博物館蔵）



※中央（横顔）と右の写真は、発掘直後の埴輪



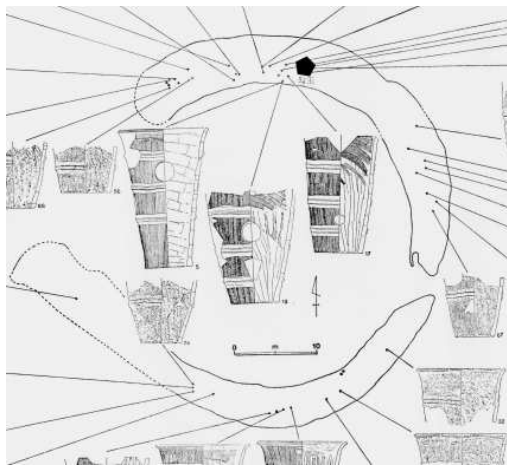
稲荷塚古墳出土品(2)

勾玉(まがたま)

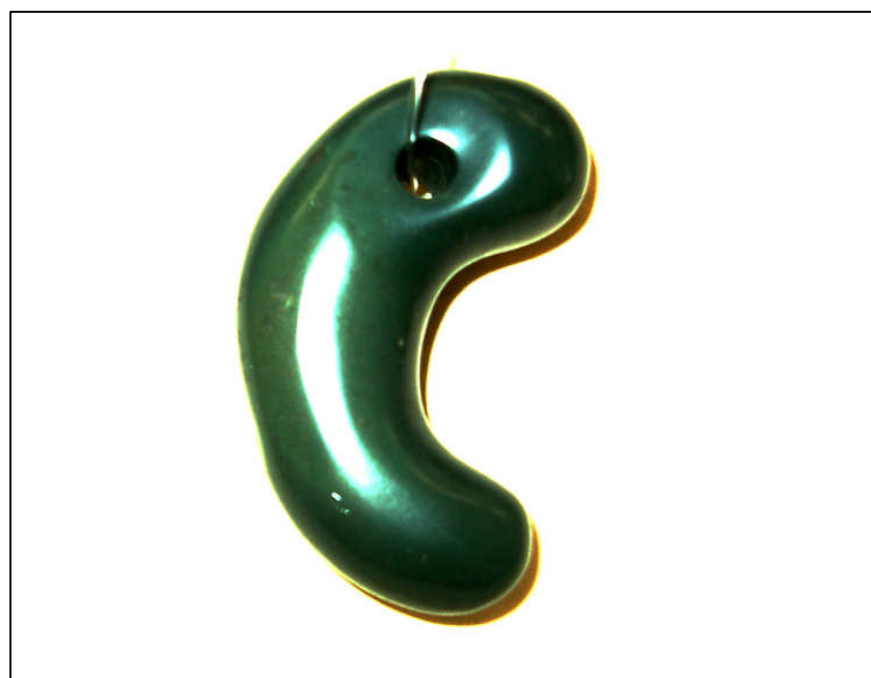
装身用の玉の一種で、頭から尾にいたって次第に細くC字状にわん曲し、頭部に紐を通すための小さな穴があいている。原型は動物の歯牙に穴をあけて吊り下げて用いたものとする説や母親の胎内の胎児を表すなどとする説がある。縄文時代以来みられ、古墳時代頃には権力の象徴とされるようになった。

材質は、古墳時代には翡翠(ヒスイ)【硬玉】製(緑色)を中心に、碧玉(ヘキギョク)製(緑・紅・黄褐色)も多い。滑石(カッセキ)製(白・淡緑色)は中期に祭祀用として一括して大量に出土する例が多い。後期には、水晶・瑪瑙(メノウ)・琥珀(コハク)・金銅・ガラス製などもみられる。

右の写真は、稲荷塚古墳周溝の北側から出土した勾玉で碧玉製である。



古墳北側(五角形の印)より出土



稲荷塚古墳出土勾玉(さいたま市立博物館蔵)

古代のアクセサリ

古墳時代の装身具には勾玉以外にも、管玉、丸玉、小玉などがある。これらの玉には穴があけられ紐を通して使われたことが分かっている。管玉、丸玉、小玉は主にネックレス、ブレスレットとして使われていた。古墳時代の埴輪にはアングレット(足首用アクセサリ)が表されているものもあった。

ネックレスには、500個あるいは1000個に近い大量の管玉、小玉が使われた状況を示す出土例もある。それに対し、勾玉は1個あるいは2、3個でペンダントヘッドとされるのが普通で、単体で使われたものは管玉、小玉のネックレスと組み合わせたものがある。



水晶製管玉・丸玉・勾玉(武笠昇司氏所蔵)

(参考文献)

大宮市教育委員会

『稲荷塚古墳周溝確認調査報告』1987年

『大宮のむかしといま』

金井塚良一著 『人物埴輪を語る』

伊都歴史資料館編 『王のアクセサリ』

国史大辞典

(編集) 2006 西高古墳調査チーム

小澤 陵 鹿兒島達矢 星野貴史

安藤拓己 村岡優太 関根一馬